

2020/9/5

(うとQブログ カッコつけなきや楽になる)

我が国国民の中にある最強位基底概念は、道徳でも倫理でも法律でもなく「美学・美意識」である。

一体何のことを言っているの？と思われる方も多いかと思います。

そこで、もう少し申し上げますと

「様式美」「型」「スタイル」

で、更に申し上げますと

「カッコ」(カッコいいか悪いか)です。

しかも、その「カッコよさ」の幅、範囲たるや極めて「狭く」「精緻」且つ「厳密」で、殆どオリンピックの超難度技、完璧美技実現レベルであり、そのターゲット幅を少しでも外れると「何の価値もない」無意味なものとして却下される極めて「峻烈峻厳」なものといえましょう(反対に言えば「カッコわるさ」の蔑み方が半端なく物すぎましい)

なので、そう負いそれとは手を出せなくなってしまいます。しかもお互いがその出来不出来について監視し合うという「日常的監視網」に晒されているとすれば、益々の事となります。少し話を元に戻しますと、この「様式美」のもたらす例として挙げられる物に、我が国の英語教育の過度に厳密な文法規則の適応やら儀式の重用、お役所における文書、書面、手続きの「何をにおいても守るべきルーティン」等があります。

今コロナ禍に於いて、これらに頻繁に接する機会が増えると、この様式美に基づく、わが国民の几帳面さ、生真面目さ、丁寧さがいい加減いやになる時があります。

「ここまでやらないといけないのか!!」「何をそう儀式ばっているんだ?」「もっとラフにできないの?」

縦横斜め、上下左右すべてに矛盾無きよう整合性が取れて初めて「よし」とする「様式美重用癖」

外国人は様式美(フォーマル)をたまにはカッコいいと思いますが、ラフはラフで楽しんでしまうのに対して、我が国国民はフォーマルだと安心しますが、ラフとなるとむしろ不安や警戒心を抱いてしまうようです。

もっと言えば相手が自分に対してフォーマルに振舞うと納得し、ラフに振舞うと何か一つ下に見られた、粗雑に扱われた、いや馬鹿にされた、と侮蔑を感じるようです。

となると、我が国国民自身が自然に抱くラフで型の整わないものは、自然とネグられ、その行き場を失い、水面下に潜ることになってしまいます。

ところが人間というものは、逆にその型の整わない自然なもので、つまり「本音本心」を知りたがるものなので、それを求めて「カッコよさの維持上」或いは「カッコ悪さの隠蔽上」表立ってはできない探索行為、即ち「重層的裏読み行為、逆張り行為、気づかぬ振りのチラ見行為」が始まることになるようです

(これは譬えていえば各々の日常全てが、片や、自国(自分)の体裁、大義名分を繕いつつ、

片や、相手の弱みに付け入るすきを虎視眈々と窺っている国際会議上での外交代表部全権責任者のようなもので、一瞬たりとも気の抜けない駆け引き（緊張）の連続となります）

そんなことを行住坐臥やっついては身が持ちません。なので、いっそのこと

「カッコなんかつけず、細かいこと、ぐちゃぐちゃ言わないで、大らかにラフも認めろよな!!」

と周りに言い放ってしまっってはどうでしょう？

本来、それだけで済む話が、あれよ、あれよという間に「とんでもなく御大層」になってしまっているような気がします。

事業の成功にしても小さな物は其処かしこに数多あるのに「一代にして年商ウン千億」じゃないと成功とは認めない風土が、却って「起業しようという思い」の芽を無言のうちに摘んでしまっている様な気もしております。

蛇足ながら、ですが。